

CEFR-J x 27: CEFR-J 開発・利用の経緯と多言語利用

CEFR-J x 27: Development of the framework and its multilingual applications

投野 由紀夫

Yukio Tono

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨: 本稿では、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を日本の英語教育に適用した CEFR-J というプロジェクトを紹介し、CEFR を各国・地域の状況やニーズに応じてローカライズしていく具体的な方法や課題を考察する。また細分化したレベルに言語材料を配当していく参照レベル記述の科学的な手法を紹介し、CEFR の枠組を具体化するためのさまざまな試みを紹介する。最後に東京外国語大学が行っている CEFR-J の多言語利用のプロジェクト CEFR-J x 27 について解説し、多言語化の意義や課題を考察する。

キーワード: ヨーロッパ言語共通参照枠, 参照レベル記述, 多言語プロジェクト

Keywords: CEFR, Reference Level Descriptions, Multilingual project

1. はじめに

本稿では、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を基に日本の英語教育の一貫した目標設定と言語材料整備のために整備された CEFR-J (投野, 2013) というプロジェクトを紹介し、CEFR を各国・地域の状況やニーズに応じてローカライズしていく具体的な方法 (利用環境整備、言語資源整備など) を提案する。また最後に東京外国語大学で現在実施されている CEFR-J を利用した多言語教育・評価プログラム「CEFR-J x 27 プロジェクト」の概要を紹介する。まず CEFR 構築とその適用の研究の歴史的経緯を見る (2.)、続いて CEFR-J の構築方法 (3.)、CEFR-J の活用度を高める関連研究と資料構築 (4.)、CAN-DO ベースのタスク・テスト開発 (5.)、最後に CEFR-J x 27 プロジェクトの紹介 (6.) を行う。

2. CEFR 構築とその適用の研究

CEFR は欧州評議会の外国語教育政策部門で永年にわたる研究の成果として 2001 年にまとめられたものである。1970 年代の Threshold Level (van Ek, 1974) が CEFR の発達の源流といえる著書である。これは、英語圏にきた移民がある程度語学習得を終え、社会的に自立した外国語使用者として生活をする時に、英語でどのような知識や技能を身につけているか、ということを一覧化したものである。枠組には言語中立を意識して、文法構造ではなく、機能 (function) と概念 (notion) という言葉の意味を中心に据え、それに詳細にカテゴリーと言語表現・語彙を付与して言語材料一覧を作成したものである。これがフランス語、ドイツ語などに多言語化していき、同時に英語に関してはケンブリッジ大学の英語テスト構築部門がその上下のレベルを欧州評議会と共同でテストを作成し具体化していった。

この Threshold Level から発生した言語習得段階のモデルが、EU という統合母体を得て 1990 年代から徐々に個別言語の目録のような状態から共通枠組へ整理しようという試みがなされ、その中で Brian North が中心となって、能力記述子 (illustrative descriptor) の項目困難度の特定という手法を開発し、言語

中立の CAN-DO リストによる表現へと抽象度を上げていき、現在の CEFR の枠組に発展していくのである。

CEFR-J の開発の発端は、2004-2007 年度科学研究費基盤研究(A)（研究代表者：小池生夫、課題番号 16202010）が土台になっている。もともとは日本の英語教育の抜本的な改革のために、国内の小中高大一貫の到達目標やカリキュラムを構築する可能性を模索したことから始まる。国内では小学校から企業の英語力まで、各レベルがどのような目標設定において英語教育を実践しているかを調査しつつ、海外では欧州、アジアを中心に各国の英語教育政策やナショナル・カリキュラムを研究した。そうする中で、2001 年に発表された CEFR が欧州で徐々に浸透しつつあることが明確になり、2007 年度の最終報告書では日本で英語教育の到達指標を作るのに時間をかけるよりも CEFR をどのように自国に適用するかを研究する方が得策である、という結論に達した（小池, 2008）

3. CEFR-J の構築方法

2008 年度から 4 年をかけて新しい基盤研究(A)（代表：投野由紀夫、課題番号 20242011）を取得。プロジェクト名を CEFR-J とし、本格的に日本に CEFR を導入する方法を検討した。我々が最も留意したのは CEFR の A1 から C2 までの 6 段階のレベルは日本の英語学習者には大まかすぎる、という点であった。そこで A1 の前に Pre-A1, A1 を 3 区分（A1.1～A1.3）、A2, B1, B2 をそれぞれ 2 区分（A2.1, A2.2～B2.1, B2.2）で CEFR の 6 段階を 12 段階に細分化した¹。かつ、それらの各詳細レベルに適合する能力記述子を新たに作成するために、海外から Tony Green (Bedfordshire 大学)、Nick Saville (Cambridge ESOL、当時)らの専門家を招聘し、科研メンバーが小・中・高の専門分野に分かれてワーキング・グループを構成、能力記述子の記述方法の研修を受けながら各レベルの記述を行い、専門家の助言をもとに微修正を兼ねながら、「CEFR-J アルファ版」を設計したのである（2008～2009 年）。

CEFR-J の検証プロセス



図 1. CEFR-J の検証プロセス

¹ C1, C2 だけは細分化を行わなかったため、全部で 12 レベルになっている。

次に 2010 年度にこのアルファ版をもとに 150 名の英語教員による descriptor の並べ替え調査を行った。これは CEFR レベルを教員には知らせずに Listening, Reading, Spoken interaction, Spoken production, Writing の 5 技能別の能力記述子のカードをランダムに並べ替えて渡し、内容を吟味しながら能力順に並べ替えを行う作業である。この並べ替え調査の結果は尾関他(2012)を参照されたい。この並べ替え調査の結果、能力記述子の想定される CEFR-J レベルと教員の難易度直観とが合わない項目は何らかの形で能力記述子の記述因子が不安定であることから、その内容に関して修正・削除を施し、それらをベータ版の形で整備した（2010 年度）。このベータ版をもとに最終的に、Brian North らが用いたラッシュ・モデルとは異なる、識別度も考慮した 2 パラメーターの項目応答理論（IRT）を用い、能力記述子の項目難易度検証を 5000 人規模の英語学習者を対象に実施、これをもとに最終の version 1 を 2012 年 3 月に公開した。方法論的には、本家の Brian North らがラッシュ・モデルを用いたのに対し、2 パラメーターの IRT であること、CEFR が外国語教育の教員対象にアンケートを実施したのに対して、CEFR-J は学習者対象である点などが異なるが、Brian North との私信では、能力記述子を英語から日本語に変えただけでも、難易度がずれる可能性があるということなので、あまり細かいことを気にするよりも、基準は CEFR におきつつ、客観的な検証手段を用いつつ、状況に合わせて適切にローカライズするという点に配慮した。

CEFR-J version 1 は教育研究用だけでなく商用利用でも無償の枠組として公開され、2020 年の文科省の学習指導要領改訂でも資料として参照され、また多くの企業が CEFR-J を参照しつつ新しい英語カリキュラムやタスク・テスト開発を行いつつあり社会的なインパクトも増大している。

4. CEFR-J の活用度を高める関連研究と資料構築

続く 2012-15 年度の基盤研究(A)（代表：投野由紀夫、課題番号:24242017）では、公開した CEFR-J の CAN-DO リストに付属するさまざまな活用資料を整備していくという目的で、主なリソースとして① CEFR-J 準拠の語彙表、②CAN-DO descriptor データベース、③CEFR-J 活用ガイドブックの作成を行った（4.1.参照）。さらに CEFR-J の各レベルに配当すべき言語材料について、CEFR 本家で提唱している参照レベル記述（Reference Level Description、以下 RLD）の手法を用い、文法とテキスト特性のレベル別特徴を科学的に調査した（4.2 参照）。

4.1. CEFR-J 活用リソースの整備

CEFR-J は 12 段階、約 100 の能力記述子の集合体であるので、一般にはこのような CAN-DO リストをどう活用したらいいのかがわからない。そこで、活用資料の整備の一環で 3 つのリソースを構築した。

4.2. CEFR-J Wordlist

本リストは、2008-2011 年度科学研究費補助金（基盤研究（A））課題番号 20242011 『小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証』（研究代表者：投野由紀夫）の一環で構築された CEFR-J Wordlist という名称の語彙表である。

本語彙表は、2004-2007 年度基盤研究（A）（課題番号:16202010）（研究代表者：小池生夫）において、作成されたアジア地域の小中高英語教科書コーパス（中国・台湾・韓国の小中高の主力教科書を CEFR 基準に大まかに分類したもの）をベースに、各国・地域の CEFR レベル対応テキストに取り扱われている共通語彙を抽出する、という方法で構築された。コーパスの詳細は、当該の科研成果報告書を参照されたい。

語彙表には各レベルの単語に以下の情報が付与されている：

headword:	見出し語
pos:	品詞
Coreinventory1	A Core Inventory for General English の名詞分野カテゴリー(大項目)
Coreinventory2	A Core Inventory for General English の名詞分野カテゴリー(下位項目)
Threshold	Threshold Level に付与されている Notion category で関連するもの

CEFR-J Wordlist の語彙数は表 1 のとおりである。

表 1 . CEFR-J Wordlist レベル別語彙数

各レベル別語彙表	項目数(品詞別語)	見出し語	日本の学校教育での相当レベル
A1:	1165	1068	小学校～中学 2 年程度
A2:	1416	1359	中学 3 年～高校 1/2 年程度
B1:	2451	2358	高校 3 年～大学受験レベル
B2:	2783	2696	大学受験～大学教養レベル
合計	7815	7481	

このような語彙表があることで、CAN-DO の能力記述子の内容に適した表現にどのような語彙を用意すればよいかが比較的容易に選定できる。たとえば、A1.2 話すこと（やり取り）の能力記述子の内容は以下のようなものである：

(1) I can exchange simple opinions about very familiar topics such as likes and dislikes for sports, foods, etc., using a limited repertoire of expressions, provided that people speak clearly.

これに対応するフレーズとして、(2)を用意するとする：

- (2) a. I like .../ I don't like ...
 b. Do you like ...? / Yes, I do. No, I don't.

この際、スポーツや食べ物などの語彙を上記の語彙表で CEFR レベルを A1 に設定し、Coreinventory1 または Threshold の項目で“Hobbies and pastime”, “Food and drink”などを選ぶことで、当該レベルに教える候補となる単語を(3)のように絞り込むことができる：

(3)

apple	A0	n	Food and drink	art	A0	n	Hobbies and pastimes
banana	A0	n	Food and drink	ball	A0	n	Hobbies and pastimes
bean	A1	n	Food and drink	baseball	A0	n	Hobbies and pastimes
beef	A1	n	Food and drink	basketball	A0	n	Hobbies and pastimes
biscuit	A1	n	Food and drink	cartoon	A0	n	Hobbies and pastimes
bottle	A0	n	Food and drink	concert	A0	n	Hobbies and pastimes
bread	A0	n	Food and drink	dance	A0	n	Hobbies and pastimes
breakfast	A0	n	Food and drink	drama	A1	n	Hobbies and pastimes

現在、CEFR-J Wordlist は後述する CEFR-J Grammar Profile, Text Profile と共に、CEFR-J レベル判定用のツールの語彙難易度指標として活用されており、British National Corpus などの母語話者コーパスに基づく頻度表よりも初級レベルの学習語彙をよりの確に反映した語彙表である。CEFR-J Wordlist は CEFR-J の web サイトから無償でダウンロードして使用することができる。

4.2.1. ELP CAN-DO Descriptor Database

CEFR-J の能力記述子は本家の CEFR と同様、精選された 100 個の CAN-DO で、統計的に相対的困難度を調査されて難易度が確定している。しかし、100 程度の CAN-DO 項目だけでは、各 5 技能のできることをすべて精密に表すことができない。そこで、我々は欧州評議会の外国語政策部門が認証をしているヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio, 以下 ELP) を精査し、ここに出てくる各国が用いている具体的な CAN-DO リストのデータベースを作成。約 2,800 の能力記述子の重複などを取り除き、5 技能全体で 647 の能力記述子 (Listening: 124; Reading: 146; Spoken Interaction: 137; Spoken Production: 69; Writing: 171) にまとめ、これを英語から日本語に訳出する作業を行った。

特に訳出する際に、A-レベルの能力記述子には小学生でも読んで理解できるような別訳を設けた。通例、能力記述子の用語の使用レベルは成人向けであり、小学生には理解が困難な表現も多く、本家の CEFR でも 2017 年末の CEFR の最初の改訂時に Young Learners 用の能力記述子の補充が行われた。表 2 にデータベースの一部を示す：

表 2. ELP CAN-DO Descriptor Database の項目例

Lev.	Category/ Code	ELP descriptor(s)	General descriptors (Japanese)	Descriptors for children (Japanese)
A1	IS1-A1	I can say who I am, ask someone's name and introduce someone.	自分が誰であるか言うことができ、相手の名前を尋ねたり、相手のことを紹介することができる	自分の名前を言ったり、相手の名前を聞いたり、相手の紹介ができる
A1	IS1-A1-1	I can ask and answer simple questions, initiate and respond to simple statements in areas of immediate need or on very familiar topics[1.2000-CH]	簡単な質問をしたり、簡単な質問に答えることができる。また必要性の高いことや身近な話題について発言したり、反応することができる	簡単な質問をしたり、簡単な質問に答えることができる。また身近なことについて話したり、質問に答えることができる
A1	IS1-A1-1	I can make myself understood in a simple way but I am dependent on my partner being prepared to repeat more slowly and rephrase what I say and to help me to say what I want.	簡易な方法であれば通じるが、ゆっくり繰り返してくれたり、自分が言った事を言い直してくれたり、自分が言いたいことが言えるよう助けてくれるような相手に依存している	相手がゆっくり話したり、自分が言ったことを確認してくれるなど、やさしい人だったら自分の簡単な英語は通じる
A1	IS2-A1	I can understand simple words and phrases, like "excuse me", "sorry", "thank you", etc.	「すみません」「ごめんなさい」「ありがとう」といった簡単な語句を理解することができる	「すみません」「ごめんなさい」「ありがとう」といった簡単な語句が分かる
A1	IS2-A1	I can understand simple greetings, like "hello", "good bye", "good morning", etc.	「やあ」「さようなら」「おはよう」といった簡単な挨拶を理解することができる	「やあ」「さようなら」「おはよう」といった簡単な挨拶が分かる

この Descriptor Database も東京外国語大学投野研究室で作成され、CEFR-J の web サイトで無償公開されており、本体の CEFR-J のより具体的な CAN-DO リストの例として活用が期待されている。

4.2.2. CEFR-J ガイドブック

さらに CEFR-J の理解を深めてもらうために、2013 年大修館書店より投野(2014)を発行した。CEFR-J version 1 作成に関わった 15 名あまりの科研メンバーで分担執筆し、CEFR とは何か、CEFR-J はどのように作られたか、各レベルの概説、CEFR-J の CAN-DO アンケートと実際の能力との相関を見る調査結果、CEFR-J や CAN-DO リストの活用法などを紹介した。書籍には CD-ROM が付属し、我々が CEFR-J の能力記述子を確定する際に用いた 5000 人規模の CAN-DO アンケートとその結果データ、IRT の数値などがすべて公開されており、また付属資料として CEFR-J 本体(英語・日本語)、CEFR-J Wordlist, ELP CAN-DO Descriptor Database などがデータとして収録されており、電子的に活用できるように提供されている。日本では吉島・大橋(2004)による CEFR 本体の翻訳があるが、CEFR そのものを詳しく概説した専門書は英語教育分野ではそれまでなかったもので、このガイドブックは研究者、CAN-DO リスト作成に携わった英語教員、研修などの実務を担当する自治体の指導主事などには広く参照されるようになった。



4.3. 参照レベル記述

もう 1 つの大きな CEFR-J のプロジェクトは参照レベル記述 (RLD) である。これは CEFR 本家の official site でもガイドラインが示されている²。CEFR の各レベルが達成されるために習得すべき個別言語の語彙・文法などの言語特徴を Threshold Level 1990 で示したような言語機能と概念の inventory で共通に示そうとしたものである。実際は Threshold Level に完全準拠することはなくなり、現在ではより客観的な教材や学習者のコーパス分析の結果に基づいてされることが多くなっている。

CEFR-J ではこの RLD の概念を早くから取り入れ、2012-2015 年度基盤研究(A)でコーパス分析と自然言語処理のノウハウを活かして RLD を行うことを目標に、新たに東京工業大学、九州大学、大阪大学などの自然言語処理チームと共同で 4 年間の研究を行った。その概要を以下に解説する。

4.3.1. RLD の基本アプローチ

CEFR-J プロジェクトでは、RLD を一種のデータマイニングと位置づけて機械学習の手法を大幅に取り入れている。全体的なイメージは図 2 に示す。基本ステップは以下のようになる：

- (1) CEFR-J レベルが特定されているテキストから言語特徴の頻度を抽出する。これをトレーニング・データとして用いて機械学習を行う。
- (2) 機械学習の結果、CEFR-J レベル付きテキストの言語特徴が学習され、予測モデルが構築される
- (3) それを新しいテキスト (テスト・データ) を使って、CEFR-J レベルを判別させ、精度を見る

² https://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/DNR_Guide_EN.pdf

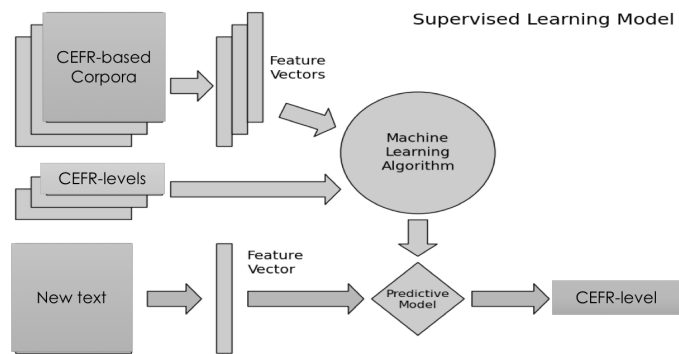


図 2. CEFR-J の機械学習を用いた CEFR レベル判定と素性の取り出しのイメージ

この段階で我々の興味としては CEFR-J レベル判定の精度もさることながら、その判定に使用されている言語特徴が何かが重要になる。機械学習の手法ではこの素性の重み付け情報をランキングなどの客観的なデータで出力してくれるので、我々にとってはこの部分の情報が CEFR-J レベル別の言語特徴を整理する上で有用である。

上記のような点を踏まえて、機械学習用に 2 種類のコーパス・データを整備した。

(A) CEFR コースブック・コーパス

1,640,000 語の CEFR 準拠で作成された英語コースブックのコーパス。英国で 2001 年の CEFR 出版後に作成され、我々でレベルの特定をするのに内容的に妥当と思われる 96 冊のコースブックを対象として、全データを OCR 処理してテキスト化したもの。

特に 4 技能と文法のスキル別タグを付与しており、技能別のインプット内容の分析が可能。

(B) 日本人英語学習者コーパス

当該の言語特徴をどの程度実際に使えているのかを見るために 2 種類の学習者コーパスからの情報を抽出した。これによりインプットとアウトプットの差違のデータを提供することが可能。

- JEFLC Corpus（投野 2007）： 約 1 万人の中高生英作文コーパス；約 70 万語
- NICT JLE Corpus（和泉他 2005）： 約 1200 人の会話テスト・コーパス；約 200 万語

我々の興味・関心はこのような RLD の手法をどのように行えば最も効果的な学習者プロファイルを記述できるか、またレベルを CEFR などと関連づけられるか、にある。このような RLD 手法の方法論的な研究は世界的にも数が少なく、2016 年 3 月に Brian North を招いて行った最終報告シンポジウムでは Grammar/Text のプロファイリング手法の科学的な検証という側面が高く評価された。

4.3.2. CEFR-J Grammar Profile

CEFR-J の RLD 作業は大別して文法特性、テキスト特性、エラー特性の 3 種類に分けて行われた。文法特性の詳しい抽出方法に関しては、石井（2016）を参照されたい。CEFR コースブック・コーパスを CLAWS（Lancaster 大学の品詞タグ付与プログラム）を用いて品詞解析および見出し語情報を付与し、それに総計 255 項目、493 種類（平叙文・疑問文・否定文などで掛け合わせたもの）の文法事項の正規表現による抽出式を作成、コースブックの (a) CEFR レベル別、(b) 発信・受信技能別、(c) CEFR-J レベルを特定するためのテキストの前・中・後の位置別の頻度データを算出、相対頻度に変換して相互比較できるように整理した。

次にこの文法頻度のデータを東工大の奥村学研究室で解析を行った。サポート・ベクター・マシン

(SVM) という機械学習の手法を用いて、これらの言語特徴を判別素性として利用した場合の素性の重み付けデータを得た。これらの詳細は、林他 (2016) を参照されたい。

以上の文法特性 RLD 研究の詳細はここでは詳しく述べる紙数がないが、国外では English Profile が唯一似たようなコーパス駆動型のデータ解析を行っている程度で、我々のような大規模かつ組織的な研究プロジェクトは世界的にも珍しく注目度も高い。投野 (2016) ではこれらの成果を CEFR-J Grammar Profile として以下のような一覧表を作成して公開した (図 3 参照) :

CEFR-J Grammar Profile (Beta version dataset)		<-# of books		<-# of books		Other profile information									
corpus version: 3.0 (20151005) / Grammatical Item List version: 20160108						DISP (bold > 2/3; normal > 1/2)									
ID	Grammatical Item (Japanese)	Sentence type	Shorthand Code	CEFR-J level	FRAG-DISP	Core Inventory	ESP	GSLO	SVM weight	SVM-CEFR	VM weight	2-SVM-CEFR	2-SVM weight	3-SVM-CEFR	3-SVM weight
1	人称代名詞主格(I)+be: I am	肯定平叙	PPHS1.I.am	A1.1	A1	A1	A1	A1	0.319	B1	0.17	B2			
1-1	人称代名詞主格(I)+be: I am not	否定平叙	PPHS1.I.am_not	A1.1	A1	A1	A1-A2, C1	A1	0.477	A1	0.159	B2			
1-2	人称代名詞主格(I)+be: Am I ...?	肯定疑問	PPHS1.am_I			A1	A1-A2	A1							
1-3	人称代名詞主格(I)+be: Am I not ...?	否定疑問	PPHS1.am_I_not			A1	N/A	A1							
2	人称代名詞主格(you)+be: You are	肯定平叙	PPHY.you_are	B1.1	A1	A1	A1-A2	A1							
2-1	人称代名詞主格(you)+be: You are not	否定平叙	PPHY.you_are_not			A1	A1, C2	A1							
2-2	人称代名詞主格(you)+be: Are you ...?	肯定疑問	PPHY.are_you	A1.3	A1	A1	A1-A2	A1							
2-3	人称代名詞主格(you)+be: Aren't you ...?	否定疑問	PPHY.aren't_you			A1	B1	A1							
3	人称代名詞主格(he/she)+be: he/she is	肯定平叙	PPHS1.he.she_is	A1.1	A1	A1	A1	A1	0.158	A1	0.095	B2			
3-1	人称代名詞主格(he/she)+be: he/she is not	否定平叙	PPHS1.he.she_is_not			A1	A1	A1	1	A1	0.489	A2	0.232	B2	
3-2	人称代名詞主格(he/she)+be: Is he/she ...?	肯定疑問	PPHS1.is_he.she			A1	A1	A1							
3-3	人称代名詞主格(he/she)+be: Isn't he/she ...?	否定疑問	PPHS1.isn't_he.she			A1	A2, B1	A1							
4	人称代名詞主格(we)+be: we are	肯定平叙	PPHS2.we_are	A1.1	A1	A1	A1	A1	0.865	B2					
4-1	人称代名詞主格(we)+be: we are not	否定平叙	PPHS2.we_are_not			A1	A1	A1	0.053	B2					
4-2	人称代名詞主格(we)+be: Are we ...?	肯定疑問	PPHS2.are_we			A1	A1	A1							
4-3	人称代名詞主格(we)+be: Aren't we ...?	否定疑問	PPHS2.aren't_we			A1	B1	A1							

図 3. CEFR-J Grammar Profile (Beta version) のイメージ

ここには前述の 255 項目の文法事項に関して、暫定 CEFR-J レベル、海外の代表的な RLD 研究の情報 (Core Inventory, English Grammar Profile, Global Scale of English Learning Objectives) を併記し、かつ SVM の重み付け情報を参考値として付与している。この資料は投野 (2016) の一部として、CEFR-J web サイトから PDF 版でダウンロードできる。

5. CAN-DO ベースのタスク・テスト開発

CEFR-J の最新の研究は 2016-2019 年度科研費基盤研究 (A) (根岸雅史代表) として進捗している。今回は CAN-DO ベースの具体的なタスクやテストの開発に焦点が移行しており、それにどのように語彙・文法の RLD 資料をからめるか、というところが重要な観点になる。5 技能の CAN-DO ベースのテストを予備調査で作成、項目応答理論を用いて難易度を検証し、それらの CAN-DO タスクと実際のテストの乖離やその原因・調整方法を議論する。また 2018 年度以降は実際にテスト会社と共同でサンプルのデータを日本中の異なるレベルの学習者集団からデータを採取し、CAN-DO ベースのテスト体系を整備、アイテム・バンクの量産化を目指す。これらの中間報告は 2018 年 3 月の CEFR-J 2018 シンポジウムと題して、成城大学を会場に行われる予定。

6. CEFR-J の多言語活用:TUFS CEFR-J x 27 プロジェクト

最後に CEFR-J を用いた多言語教育への活用を紹介する。これは東京外国語大学のスーパーグローバル大学構想の一環で行われているもので、CEFR-J を東京外国語大学の 27 の言語専攻の教育に共通枠組として利用し、達成度の可視化を目指すというものである。図 4 はプロジェクト・リーフレットからの転載イメージである。

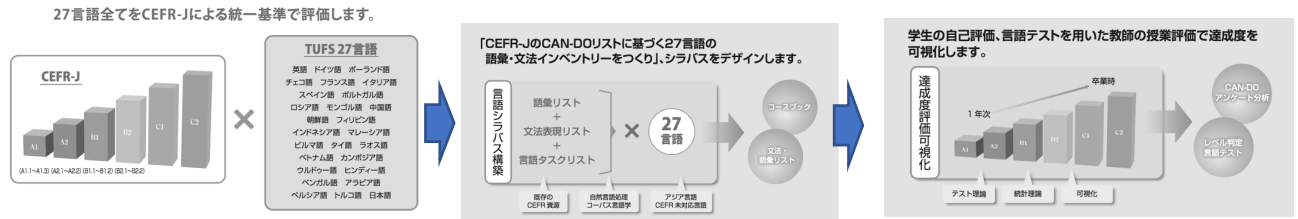


図 4. CEFR-J x 27 プロジェクトのイメージ

CEFR-J x 27 プロジェクトの特徴は、良くも悪くも CEFR-J の英語での言語資源を最大限に活用する、という点にある。このために我々が英語で構築してきた CEFR-J Wordlist, Phrase List などの資料を多言語化するという取り組みを行っている。英語を除く 26 言語への変換は Google 翻訳を用い、それを各言語専攻のチームで内容チェックを行っている。2017 年度ではほぼ全言語の A2 レベルまでの語彙表確定が終了している。さらに CEFR-J CAN-DO ごとに作成されたフレーズ・リストを多言語化する試みも行われている。これは機能別表現集のように使うことができるため、具体的なタスク開発に活用が期待されている。これらを 2018 年度には各言語のフレーズ集やハンドブック形式で、外部出版社から出版企画として CEFR-J x 27 シリーズと銘打って社会的にもインパクトのある言語資源の整備を行う予定である。

多言語化にはいろいろな課題もある。英語の言語資源からのマッピングが比較的良好にいく部分とそうでない部分が言語ごとに異なる。特にアジア言語は文字や文法体系がことなることでマッピングそのものが困難であるという主張をされる言語チームも出てくる。しかしながら、アジア言語でも英語を国際語として利用する地域が増えており、英語の枠組を利用することに違和感がない言語も多く、一概に英語からのマッピングが不可能とは言えない。今回のプロジェクトでは各言語チームにまず英語資源を提示してイメージを具体的に持ってもらい、その中で共通部分と差違を明確にし、差違に関しては言語ごとに独自コーパスを作ったり、教材分析をしたり、といったサポートを行えるようにしたいと考えている。

7. E-learning 環境への統合

SGU の一環で、CEFR-J x 27 の言語資源を利用した e-learning 環境の構築もスタートしている。これは大別すると以下の 3 種類のアプリやツールとして学生の利用に供する予定である：

(1) CEFR-J x 27 単語学習アプリ

スマートフォン（iOS と Android）で練習できる単語学習アプリ。CEFR-J Wordlist の A2 レベルまでの語彙を自分が登録した 27 言語で学習することが可能。形式はフラッシュカード学習で学習履歴を管理できる。

(2) CEFR-J x 27 CAN-DO フレーズ学習ツール

CAN-DO 別フレーズ・リストをもとにした学習ツール。言語ごとに日本語から対象言語へのライティングを web 上で行うツール。正解文との差分を表示することができ、何度も繰り返し正解に近づけるように練習することで文法や語彙を学べる。英語と中国語に関しては文字の音声入力に対応している。

(3) CEFR-J x 27 会話・作文コーパス収集ツール

CEFR に対応する発話や作文を個人の履歴をとりながらサーバー上に音声・文字情報として蓄積するツールである。これによってタスクを教員が上手に課せば、4 技能のうち発信技能に関するデータをコンピューター上で簡単に収集することができる。これにより将来的な CEFR 基準による学習記録や

評価がより正確にできることになる。英語と中国語に関しては文字の音声入力に対応している。

8. まとめ

CEFR の日本での応用の 1 つとして CEFR-J プロジェクトを紹介した。CEFR 適用のためには、日本という環境におけるさまざまな要因を考慮に入れる必要があるが、CEFR-J は環境整備を具体的に行うことで積極的に導入を図り、共通基盤を作りながらシステムの効果検証をしっかりと行うことで、より有効な教育手法への提言ができる、と考えている。CEFR 導入には否定的な意見の研究者もいるが、応用言語学の専門家集団として外国語教育の国際的・総合的な基盤として利用価値があるという信念のもと、それをどう効果的に適用するかという研究課題に取り組み、社会的にインパクトのある提言をしたいと考えている。

参考文献

- 石井康毅 2016. 「CEFR-J Grammar Profile 構築のための英文法項目の選定・抽出・頻度集計・精度評価」 投野由紀夫（編）『学習者コーパスによる英語 CEFR レベル基準特性の特定と活用に関する総合的研究』平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究課題番号 24242017、研究成果報告書, pp.31-41.
- 和泉絵美・内元清貴・井佐原均（編著）2005. 『日本人 1200 人の英語スピーキング・コーパス』東京：アルク.
- 尾関直子・村野井仁・緑川日出子・高橋美由紀・笹島茂・椎名紀久子・川成美香. 2013. 「教員によるディスクリプタ並べ替え調査」 投野由紀夫（編）. 2013. 『小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証』（平成 20-23 年度科学研究費 基盤研究(A) 研究成果報告書（課題番号:20242011）平成 24 年 3 月, pp.7-91.
- 小池生夫（編）. 2008. 『第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究』平成 16-19 年度科学研究費 基盤研究(A) 研究成果報告書（課題番号: 16202010）. 平成 20 年 3 月.
- 林 正頼・石井康毅・高村大也・奥村学・投野由紀夫 2016. 「CEFR-based Coursebook Corpus からの CEFR レベル別基準特性の特定」 投野由紀夫（編）『学習者コーパスによる英語 CEFR レベル基準特性の特定と活用に関する総合的研究』平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究課題番号 24242017、研究成果報告書, pp.42-51.
- 投野由紀夫（編著）2007. 『日本人中高生 1 万人の英語コーパス：JEFLC Corpus ー中高生が書く英文の実態とその分析』東京：小学館.
- 投野由紀夫（編著）2013. 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』東京：大修館書店.
- 投野由紀夫（編）2016. 『学習者コーパスによる英語 CEFR レベル基準特性の特定と活用に関する総合的研究』平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究課題番号 24242017、研究成果報告書. (<http://www.cefr-j.org/PDF/TonoKaken2012-2015FinalReport.pdf> よりダウンロード可能)
- 吉島茂・大橋理枝（翻訳）2004. 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』東京：朝日出版社.

執筆者連絡先:y.tono@tufs.ac.jp